

力もしていないでPESを運営しているのではないか」という思いになります。感謝、感謝の気持ちでいっぱいです。多くの支援者の助けでできていること、このことは所員全員が嘯みしめなければなりません。

支援者の中には、亡くなられた方も少なくありません。そんな方々はまだ助け足りない、もっと支援しようとして天国から見守っているのではないか。このように思わせるほどの支援を頂いてきました。本当に感謝、感謝です。

建築とは、設計とは、設備とは？

東京都が実施した東京国際フォーラムの国際公開設計コンペで最優秀を射止めたラファエル・ヴィニオリ（アメリカ）について、彼に設計を依頼したニューヨーク市のヒラリー・ブラウン氏から聞いた話があります。ニューヨークにある彼のオフィスには、設計のためのツールはなく、グランドピアノが1台あるだけということでした。もちろん設計をやめているわけではありません。事務所に設計ツールはなくても、人材ネットワークなどを活用すれば設計は可能です。

ヴィニオリの考え方の中には、人間の感性の中で建物はどうあるべきか、人間が住むためにはどうあるべきかを常に考えようとする意識があったのではないかと推察します。人間の感性の中で一番最後まで残るもの、残らなければならないものは何かというと、耳の感覚ではないでしょうか。音はとても重要です。ですから最後まで残る必要があるように思います。

建築空間をつくる人にとってもっとも大切な感性は、耳の感覚による「聴く力」だと思います。彼

のオフィスにグランドピアノが置いてあるのも、聴く力を大切にしているからなのでしょう。名古屋のポートビル設計者の村瀬郊一先生も音楽しか聴いていないはずなのに、素晴らしいデザインをする建築家です。

設備設計は建築設計の下請的な存在で、単独で仕事をいただけることはほとんどありませんでした。現在もその構図は基本的には変わっていません。下請として建築設計事務所やゼネコンの下で業務をこなし、両者を見上げる存在です。

自由な発想や自由な曲線は頭の中では自由に考え、つくり上げるものは一つの固定化した無機質なものになったとしても、それはやはり全員が求めるものではありません。その辺りを我々が間違えると、設備設計事務所は建築設計事務所らから見下されてしまいます。作業の効率化や合理化ばかりを求められ、我々もそれに乗ってしまって、どうやら早く作業ができるかばかりを考えてしまうようになるでしょう。そのような設備設計事務所が見受けられるのはとても残念です。私が設備設計協会の会合にあまり出席しないのは、対等に建築設計事務所と仕事をしたいという思いからです。

原点に回帰して取り組む

PESの原点は「人間と機械との調和」です。この接点を見出し実践しようと努力してまいりました。その上で機械が入る建築には、自然を生かしながら人間と自然が調和した設備を追求した取組を推進しています。

建築から設備をなくそうというのが私の原点です。それで設備の勉強を始めました。現実的には難しいことは理解していますが、建築から設備をなくせば建設費もメンテナンスも安く抑えられます。